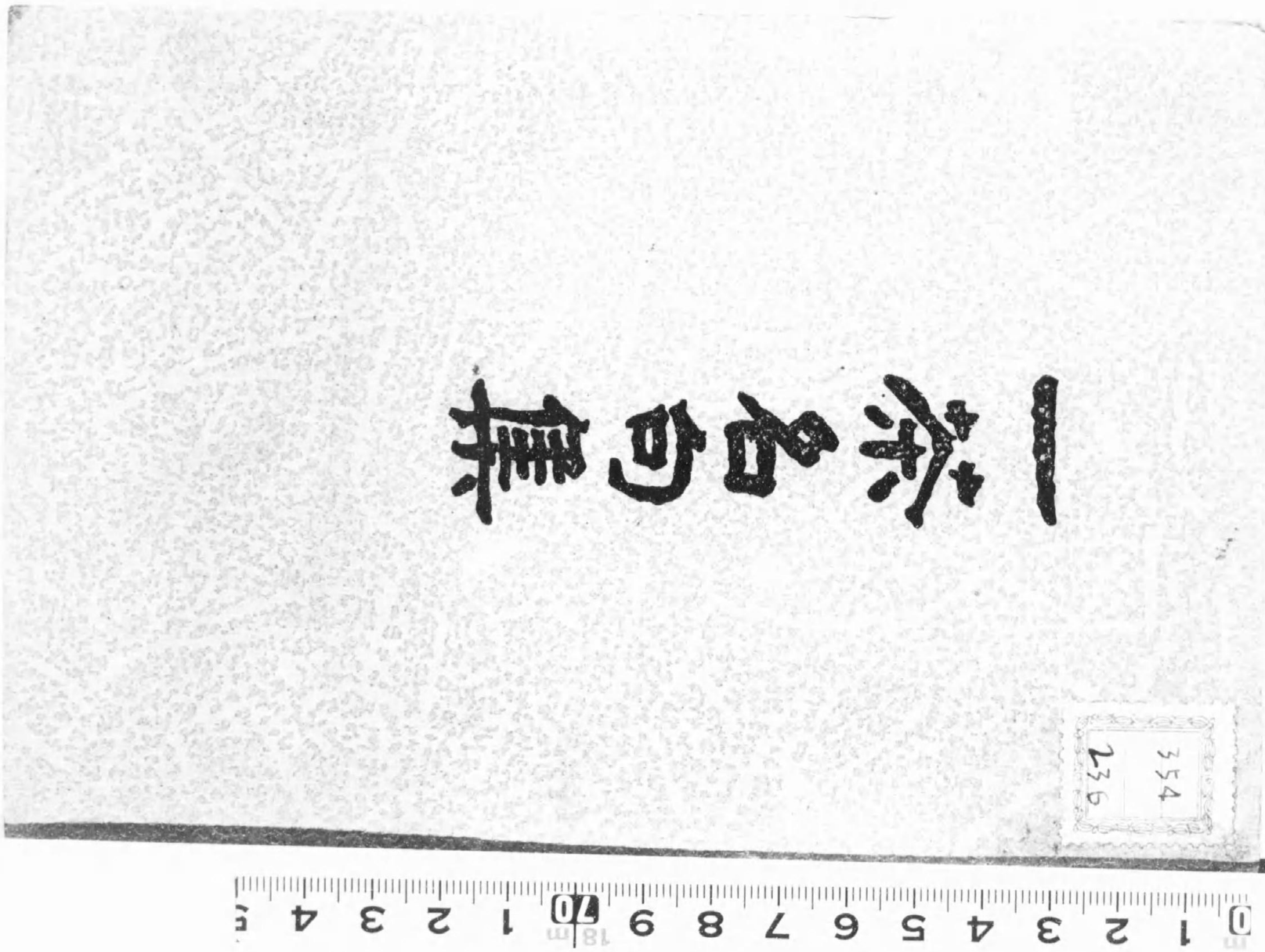

35
23
5
4

特214
93

一茶名句集

一茶名句集序

俳句専門家以外に多くの讀者を有し、研究者を持つといふ點に於て、一茶は實に芭蕉の次位にある。彼の悲慘なる境遇、悲痛なる性格、畸行などがその一見漂逸なる作品と相俟つて一般に知れ渡つたのである。斯く世間的に有名になつたことは固より一茶の爲に喜ぶべきことにはちがひないが、彼を單なる滑稽家、單なる洒落家の如く誤解しつゝある世評の如きは寧ろ彼の爲に惜しまねばならぬ。

痩蛙負けるな一茶こゝにあり　一茶

芽出度さも中位なりおらが春　同

斯様な句を以て一茶の作品を代表させるならば、如何にあきらめのよい彼でも地下に泣くことであらう。俳人としての一茶の面目は斯様な駄洒落でなく却て眞面目な句にある。滑稽洒落から到達したところの悲痛刺すが如き句境涯にある。

橋上乞食

母親を霜除けにして寢た子かな　一茶

子子の天上すなり三日の月　同

春雨や鼠のなめる角田川　同

等枚擧にいとま無いが、彼の眞の境涯から泌み出たところの作品は、かゝる眞面目な句にあることは此句集を繙くものゝ必ず首肯す

るところであらう。世の一茶愛好者及研究者はこの點に於て、從來の色眼鏡を外してから彼の作品を通讀すべきであらう。

於東京市外瀧ノ川假寓

編者識

凡例

一、本句集は一茶名句集と名づけたれども、彼の句全體を集めたるが故に、一切取捨を加へず、且つ一字の相違あるものをも併せ記したり。

一、短時日に倉卒編纂したればなほ遺玉多かるべきを憂ふ。

一、本集校正中、一茶の未だ公にせられざる句の發表せられしことを聞知せるも、遺憾ながら間に合はざりし爲、後日機を得て增補することゝなせり。

一茶名句集目次

序文……一
凡例……三
新年之部……一
春之部……一七
夏之部……八一
秋之部……一六一
冬之部……二二九
附錄索引

一茶略傳

通稱彌太郎、姓小林氏、自ら俳諧寺一茶と名乘つてゐた。蘇生坊の別號がある。信濃國上水內郡柏原村の人、幼時母を失つてその爲慳貪邪曲なる繼母の爲に非常の苦患を甜めた。このことは彼の文章に委曲をつくしてある。八歲の時に

親のない雀やおれと來て遊べ　一茶

といふ句を作つたことは人口に膾炙されてゐる。後年異母弟に家督を讓り、妻子を連れて別居した。俳句は成美について學んだといふことである。文政十年十一月十九日歿、享年六十五、生地明專寺に葬る。

著書には、一茶發句集、一茶聯句集、一茶句帳、おらが春、七番日記。等がある。

一茶名句集索引

新年

時候

元日　三
今朝の春　三
初春　三
年立　四
春立　四
正月　四
新年　六

天文

初日　七
初空　七
御降　七

人事

年賀　七
年玉　八
門松　八
蓬萊　八
若水　八
飾　九
水祝　九
福藁　七
萬歳　七
猿曳　七
書初　八
初夢　八
雜煮　八
餅花　八
箔衣始　九
歯固　九
手毬　一〇
藪入　一〇

子の日　一二
小松引　一二

動物

初鳥　一二
霞
初雷　一三
齊　一三
春風
若菜　一三
春月
春雨

春

時候

脳
冴返る　一七
春雪
春の日　一七
殘雪
日永　一七
雪解
長閑　一九
凍解

天文

暮春　一九
水温む
春の山　二〇
山笑ふ　二〇
陽炎　二三
苗代　二三
焼野　二四
焼山　二五
涅槃會　二八
初午　二八
佐保姫
彼岸　二八
曲水　二九
雛　三〇

田代　三六
二日灸　三六
燈塞　三六
草餅　三六
摘草　三七
五加木飯　三七
茶摘　三七
風　三七
接木　三八
畑打田打　三八
種蒔　三九
朝顔蒔　三九
汐干　三九
落鹿角　三六
戀猫　三六
猫の仔　三六
田鼠化鶉　三六
雉子　三七
歸雁　三七
鶯　三七
雲雀　三七
燕　三八
鳥の巣　三八
雀子　三九
蛙　三九
蝶　三九

蟲　四〇
虻　四〇
田螺　四一
まひ〳〵　四二

植物

梅　四三
柳　四六
櫻　四八
椿　四九
藤の花　五〇
躑躅　五〇
山吹　五二
木の芽　五五
五八
五八
五八
五八
五九
六三
六五
七五
七五
七五
七五
七六

薬の花　菫　若草　草萠　蕨　蕗の薹

夏

時候

六月　夏の夜　短夜　春

七六　七六　七七　七七　八一　八一　八二

涼し　土用　梅雨　五月雨　夕立　夏の雨　虎が雨　夏の月　雲の峰　夏山　清水

天文　地理

八四　八七　八七　八七　九〇　九〇　九一　九二

青田　夏衣　袷　帷子　浴衣　潔佛　御祓　茅の輪　つくま祭　藤棚　夏籠　菖蒲酒

一〇〇　一〇一　一〇二　一〇三　一〇四　一〇五　一〇六　一〇七　一〇八　一〇九　一一〇　一一一

粽　薬日　夏座敷　納涼　青簾　虫干　蓮寝　打水　扇　団扇　蚊帳　紙帳　蚊遣

一〇〇　一〇一　一〇一　一〇二　一〇二　一〇八　一〇八　一一〇　一一〇　一一二　一一三　一一四

釣瓶　心太　一夜酒　冷汁　目傘　田植　早乙女　鵜飼　鮎　川狩　動物　鹿の子　杜鵑

一一五　一一五　一一五　一一五　一一六　一一六　一一七　一一八　一一九　一二〇　一二一　一二二

閑古鳥　羽抜鳥　老鶯　行々子　水鶏　通し鴨　蝙蝠　蒸　蝸牛　蟬　蜂　蝿　羽蟻

一二四　一二五　一二六　一二六　一二六　一二七　一二七　一二七　一二八　一二九　一三〇　一三〇　一三三

蠶 一三三
蚕 一三七
蚊 一三九
火取虫 一四一
毛虫 一四三
尺取虫 一四三
蜘蛛の子 一四三
孑孑 一四三
鰹 一四四

植物

夏木立 一四五
若葉 一四五
茂 一四六
木下闇
柿の花
李
卯の花
茨の花
牡丹
合歡の花
芥子の花
蓋顔
夕顔
葵
杜若
あやめ
一四六 撫子 一五一
一四六 蓼の花 一五一
一四七 棚吊草 一五二
一四七 苔の花 一五二
一四八 若竹 一五二
一四八 筍 一五二
一四九 麥 一五四
一四九 麥秋 一五四
一四九 瓜 一五四
一五〇 茄子 一五五
一五〇 青瓢 一五五
一五〇 眞桑瓜 一五五
一五一 九輪草 一五六

蓮 一五六
蟬 一五六
早苗 一五七

秋

候時

立秋 一六一
今朝の秋 一六一
殘暑 一六一
二百十日 一六一
朝寒 一六二
夜寒 一六二
やゝ寒 一六四
うそ寒
秋の日和
秋の日
秋の夜
夜長
秋の暮
行秋
一六四 三日月 一七七
一六五 後の月 一七八
一六五 待宵 一七八
一六五 十三夜 一七八
一六五 十五夜 一七八
一六六 霧 一七九
一六八 秋の雨 一八〇
稲妻 一八〇

天文

野分
天の川
月
名月
盆の月
一七一 秋の山 一八一
一七二 秋の野 一八一
一七四 露 一八一

地理

人事

七夕　一八六
盂蘭盆會　一八八
生身魂　一八九
墓參　一八九
燈籠　一八九
攝待　一八九
燒米　一八九
刷引　一八九
角力　一九〇
花火　一九一
踊　一九一
新酒　一九一
田守　一九一
案山子　一八六
鳴子　一八八
引板　一八九
毛見　一八九
砧　一八九
重陽　一八九
動物
鹿　一八九
蛇入穴　一九〇
雁　一九一
渡鳥　一九一
鳴　一九一
鵙　一九一
啄木鳥　一九二
鶉　一九二
山雀　一九二
五十雀　一九二
虫　一九三
秋蟬　一九三
蜻蛉　一九三
きりぐす　一九三
蟀　一九七
鈴虫　一九七
蟋蟀　二〇〇
蟲　二〇〇
放屁虫　二〇〇

茶立虫　二〇七
機織虫　二〇七
蚯蚓鳴く　二〇七
植物
萩　二〇七
芒　二〇八
紅葉　二〇八
桔梗　二〇八
木槿　二〇八
女郎花　二〇八
柿　二〇九
野菊　二〇九
栗　二一〇
草の花　二一〇
梨　二一一
草紅葉　二一一
櫨紅　二一一
蕎麥　二一一
籾　二一一
落穂　二一一
團栗　二一二
稻の花　二一二
木の實　二一二
新米　二一二
瓢　二一二
鬼灯　二一六
唐辛子　二一七
鼠尾草　二一八
蔦　二一九
草　二一九
雜　二二〇
冬
時候
霜月　二二〇
寒さ　二二一
小春　二二一

寒の入　二三三
大寒　二三三
冬至　二三三
冴ゆる　二三三
年の暮　二三三
師走　二三四
大年　二三四
行年　二三四
大晦日　二三四
時雨　二三五
霰　二四〇
寒月　二四〇
木枯　二四〇

雪
地理
霜
霜柱
霜枯
枯野
冬枯
氷
氷柱
寒の水
人事
神の旅
十夜

御取越　二四二
夷講　二四七
神樂　二四八
鞴祭　二四八
藥喰　二五〇
芭蕉忌　二五〇
爐開　二五〇
炭　二五一
榾　二五二
火燵　二五二
火鉢　二五二
火桶　二五二
埋火　二五二

御取越　二五三
夷講　二五三
神樂　二五三
鞴祭　二五三
藥喰　二五三
芭蕉忌　二五四
爐開　二五四
炭　二五五
榾　二五六
火燵　二五六
火鉢　二五六
火桶　二五七
埋火　二五七

冬籠　二五七
紙衣　二五九
蒲團　二六〇
衾　二六一
頭巾　二六一
衣配　二六一
寒晒　二六二
寒行　二六二
寒念佛　二六二
寒聲　二六三
寒灸　二六三
寒垢離　二六四
鉢叩　二六四

綱代
饂汁
大根引
麥蒔
鄰
橘
餅搗
煤拂
節季候
年忘
納札
年籠り
年の市

節分　二六四
年用意　二六四
年とる　二六五

動物

水鳥　二六六
千鳥　二六六
鴨　二六六
雉子　二六八
鶺鴒　二六九
寒雀　二七〇
冬の蠅　二七二
海鼠　二七二

植物

二七二
二七三
二七三

二七四
二七四
二七五
二七五
二七六
二七六
二七六

新

年

一茶名句集

落葉　二七七
冬木　二七八
枯木　二七八
枇杷の花　二七八
歸り花　二七九
水仙　二七九
枯菊　二七九
枯芒　二七九
草枯　二七九
枯女郎花　二八〇
葱　二八〇
雜　二八〇

索引終

時候

元日

元日や上々吉の淺黄空

元日も立のまんまの屑家かな

今朝の春

鶯のいな啼きやうも今朝の春

小便もうかとはならず今朝の春

花ぢやもの我も今朝から三十九

あばら家の其身其まゝ明の春

初春

初春も月夜となりぬ人の皺

不二の嶺に

年立

初春や千代のためしに立ち給ふ

あらたまの年立ちかへる虱かな

新家賀

年立や雨おちの石凹むまで

春立

春立や彌九郎改め一茶坊（イ御齋寺）

還暦

正月

道ばたの土めづらしやお正月

正月や貸下駄並ぶ日蔭坂

ござつたぞ正月早々春の雨

大雨や春早々にお正月

北國や家に雪なきお正月

齋日

けふこそは地藏の衆もお正月

正月も美濃と近江や閏月

正月が減る夜なの霞かな

正月や夜は夜とて梅の月

閏正月

正月の二つありとや浮寐鳥

春立や愚のうへにまた愚にかへる

春立や二軒つなぎの片住居

新年

春立て磯菜も千代のためしかな

薄壁やどちの穴から春が來る

春立と申もいかゞ上野山

今春が來た様子なり煙草盆

目出度さも中位なりおらが春

草庵二句

菴の春寐そべる程は霞なり

我春も上々吉ぞうめの花

文政四年元日

今年からまる儲ぞよ娑婆の空

去年五月生れたる娘に一人前の膳を据えて

這へ笑へ二つになるぞ今朝からは

天文

初日

土藏から筋違にさすはつ日かな

心から大きく見ゆる初日かな

初空

ぬかるみへ杖つゝぱつて初日かな

初空へさし出す獅子の天窓(アタマ)かな

御降

西方の初空拜む法師かな

御降りや草の庵のもり初め

御降りの祝儀に雪もちらりかな

人事

年賀　年頭に孫の笑をみやげかな

年玉　今しがた來た年玉で御慶かな

我庵やけさの年玉取に來る

隱家や猫にも一つおとし玉

門松　年玉であらまし知れる家業かな

折てさすそれも門松にて候

小兒のあどけなさを

かま獅子が腮ではらへぬ門の松

蓬萊　門松や本町筋の夜の雨

蓬萊や唯三文の御代の松

蓬萊に南無〳〵と云ふ子供かな

若水　若水やそうとつき込む梅の花

三崎の井は遊女柏木がかたなりとかや

若水のよしなき人に汲れけり

とし男につとむべき供といふものもあらざれば

名代に若水浴る烏かな

庵の井と今朝若水といはれけり

飾

三文の若水あまる庵かな
目覺して若水見るや角田川
お地藏のお首にかけるかざりかな
又今年七五三潜るなり顏の皺
二つ三つ皺にかけるやあまり七五三

水祝

逃しなや水祝はるゝ五十聟

福藥

福わらや十ばかりなる供奴

萬歳

大聲や廿日過ての御萬歳
萬歳や馬の尻へも一と祝

猿曳

舞扇猿の涙のかゝるなり

書初

小坊主が棒を引ても吉書かな
わんぱくが先づ手のひらに筆はじめ
書賃の蜜柑みい〳〵吉書かな

初夢

初夢に猫も不二見る寢やう哉

雜煮

泥速に春を迎へて
能因が腹肥したる雜煮かな

餅花

餅花の木蔭にてうちあはゝかな

齒固

齒固めにカンといはする小粒かな

着衣始

雪車曳くや揃の簑の着衣始

手毬

鳴猫に赤ン目をして手まりかな

藪入

藪入や三組一所に成田道

藪入や墓の松風うしろ吹く

藪入のわざと暮すや草の月

子の日

袴着て芝にころりと子の日かな

小松引

小松引く人とて人のおがむなり

鶴の嵩に

人の曳小まつに千代やさみすらん

動物

初鳥

門の木の阿房鳥も初聲ぞ

植物

齊

垢爪や齊の前もはづかしき

若菜

脇差の柄にぶら〳〵若菜かな

手拭で引かついだる若菜かな

竈のかどにわかするわか菜かな

四五軒で一把をわける若菜かな

春

時候

冴返る

三日月はそるぞ寒さは冴返る

春の日

春の日や暮ても見ゆる東山

日永

待々し日永となれと田舎かな

閼がりの手を曳出す日永かな

不忍の池に龜どもの菓子をねだるありさまを見るに此節婆婆に萬年の逗留もならん

永の日を喰ふや喰はずや池の龜

永日や牛の涎の一里ほど

大道へころ〳〵犬の日永かな

あたら世や日が永いのに花がさく

もたいなや花の日永を身にこまる

ぶら〳〵と歩きでのある日永かな

白犬の眉かゝれたる日永かな

日が永い〳〵とのらりくらりかな

能なしの身を棚へ上げて日永かな

大口をあいて鳥の日永かな

念佛の申賃とる日永かな

老ぬれば日の永いにも涙かな

長閑

永き日や沈香も焚かず屁もひらず

永き日や羽織ながらの板普請

永き日や遊仕事に風も吹く

長閑さや土蒔散らす雪の上

長閑さや垣間を覗く山の僧

長閑さや淺間けふりの畫の月

小金原

呼あふて長閑に暮す野馬哉

暮春

やよ虱這へ〳〵春の行方へ

ゆさ〳〵と春が行そよ野邊の草

霞

山櫻そなたの春も三十日かな
春永となまけしも今日かぎり哉

天文

天上

霞む日やさそ天人の御退屈
葛の尾に引すりて行かすみかな
迹供は霞引けり加賀守
舟人の引て上るや夕かすみ

首途

迹の家見るや霞めば霞むとて
かすむならかすめて捨てし庵かな

上野にて

柏子木や供のかけする霞から

玉川

さらし布霞のたしに聳へけり
霞む日や夕山蔭の飴の笛
けふ〳〵と霞んで暮す小家哉
霞けり憎い宿屋も迹の村
牡丹餅をくはへて霞む烏かな

西山やおのれが乘るはどの霞
横乘の馬のつゞくや夕霞
誰それと知れて霞むや門の原
ぼく〳〵と霞むで來るはどなた哉
盜人の霞むでげゝら笑哉
茶鳴子のやたらに鳴るや春霞
霞む日やしんかんとして大座敷
雉子の尾を引摺つて行霞哉
我里はどう霞んでもいびつなり
傘の雫ながらにかすみかな

春　初雷
風

老婆洗衣之圖
あの桃も流れ來よ〳〵春霞

輕井澤
笠でするさらば〳〵やうす霞

栗之六十賀
老松や又改めていく霞

菜翁と遊ぶ
此門の霞むたそくや墨田の鶴
手始めは小雷にしてすますなり
春風やとある垣根の赤草履

宿引に女も出たりはるの風

春風や牛にひかれて善光寺

はるの風おまんが布の形にふく

狗(チンコロ)が鼠とるなり春の風

春風の女見に出る女かな

ぼた餅や籔の佛も春の風

水江春色

春月

すつぽんも時や作らんはるの月

ついそこの二文渡しや春の月

土橋のお神酒徳利も春の月

春雨

三助が初瀬詣や春の雨

傘さして箱根越すなり春の雨

朝市に大肌ぬきや春の雨

掃溜の赤元結や春の雨

餅買に箱提灯や春の雨

春雨に大あくびする美人かな

袖たけの垣の嬉しやはるの雨

春雨や喰れ殘りの鴨が啼

春甫新宅賀

安堵して鼠も寐るよ春の雨

婚禮

春雨や相に相生の松の聲

春雨や鼠のなめる角田川

穴蔵の中でもものいふ春の雨

負弓の藪にかゝりてはるの雨

鳩いけんして曰

梟よ面くせ直せ春の雨

春雨や猫に踊を教へる子

春雨やさらりと抜けし正月氣

日歸りの湯治もすなり春の雨

芝居へと人はいふなり春雨の

線香や平内堂のはるの雨

春雨や御殿女中の買喰ひ

春雨や下駄で渡りし二文橋

ほんがりと麹の花や春の雨

福狐出で給ふぞよ春の雨

馬までも旅籠渡りや春の雨

奥山も博奕の世なり春の雨

棧を唄でわたるや春の雨

春雨や鯨のぼる程の瀧

人の世やすぐには降らぬ春の雨

門々のいぢくれ松も朧かな

朧

これきりと見えてどつさり春の雪

春雪

病人の大肌ぬくや春の雪

草山の肥にもなるや春の雪

雷の光る中より春の雪

淡雪とあなどるまいぞ三四尺

地理

残雪

あさましや一寸のがれに残る雪

陀彌堂に綻りて雪の残りけり

雪解

某母八十八才賀

門畠や米の字なりの雪解水

雪解や門は雀の十五日

鍋の尻ほしならべたる雪解かな

雪解や鷺が三疋立臼に

世にあればむりに解すや門の雪

菴の雪下手な消え様したりけり

門前や杖でつくりし雪解川

雪解や大はたごやの裏の松

凍解

門前や子供のつくる雪解川

凍解や山の在家も晝談義

水温む

鷺烏雀の水もぬるみけり

春の山

寢ころぶや手毬ほどでも春の山

店開の賀

山笑ふ

福の來る門や野山の朝笑ひ

橋本町上人

陽炎

陽炎や歩行ながらの御法談

かげろふや臼の中からま一筋

陽炎や子をかくされし親の顔

苗代

陽炎や手に下駄はいて善光寺

陽炎やそばやが前の箸の山

陽炎にぱつくり口を蜊かな

陽炎の中からも立つ淺生かな

陽炎や寺へ行かれし杖の穴

陽炎や掃捨芥の錢になる

陽炎や綠からころりねぼけ猫

苗代は庵の餝に青みけり

鶴亀の遊ぶ程づゝ

焼野

焼野哉

焼山

山焼の明りに下る夜舟かな

くつ付けた人も詠むる山火哉

寢がてらや嘶がてらや山を燒く

人事

二月十五日雪降りけるに

花のところへ雪のふる涅槃哉

御ねはんやとりわけ花の十五日

小うるさい花が咲とて寢釋迦哉

寢ておはしても佛ぞよ花の降る

御佛や寐てござつても花と錢

涅槃會

相伴にわれらもころり涅槃哉

花ちりて死ぬも上手な佛かな

子鳥や佛の日とて口を明く

死花をぱつと咲せる佛かな

涅槃會や鳥も法華經〈と

珠數かけて山鳩ならふ涅槃かな

其脇にころり小僧の寐釋迦かな

初午

初午や火を焚く畠の夜の雨

花の世を無官の狐鳴にけり

初午や門へつん出す庭切戸

佐保姫

さほ姫の染損ひや班山

彼岸

彼岸とて袖に這はする虱かな

中日と知つてのさばる虱かな

曲水

盃よまつ流るゝな三日の月

筆添ておもふ盃流しけり

雛

川下や果は閻とりの小盃

手のひらにかざつて見るや市の雛

浦風にお色の黒いひいなかな

煤け雛しかも上座をめされけり

花咲ぬ片山かげに雛まつり

へな土の雛も同じ祭かな

土雛も祭の花はありにけり

土の雛花の木蔭に隠居かな

片偶に煤け雛と夫婦かな

花の世や花も木篦の雛祭り

雛棚にちよいと直りし小猫かな

ひとつ雛の眼をせよよい娘

持たすれば雛をなだむる小供かな

古雛やがらくた店の日南ぼこ

へな土でつくねた雛もまつりかな

居並んでだるまも雛の仲間かな

山代

一年賣りて親を養ふは孝行云んかたなし

出代や汁の實なども蒔て置く

出代やいづくもおなじ梅の花

出代の市にさらすや五十顔

出代や山越して見る京の空

出代やねらひすまして拔參り

二日灸

かく家や猫にもいたふ二日灸

爐塞

爐の蓋を早雀等が踏みにけり

草餅

おらが世やそこらの草も餅になる

摘草

草餅を鍋でこねても祝かな

子ありてや蓬の門の蓬餅

武藏野の草をつむとてはれ着かな

五加木飯

西行にお宿申さむうこぎ飯

茶摘

茶もつみぬ杉も作りぬ丘の家

母の分つめば用なき茶山かな

婆殿の目鏡をかけて茶摘哉

信樂（シガラキ）や大僧正も茶つみ唄

風

塗笠にはらり〳〵と汲茶かな

風あげてゆるりとしたる小村かな

美しき凧あがりけり乞食小屋

乞食子やあるきながらの凧

日の暮に凧の揃ふや町の空

接木

歯も持たぬ口にくはへてつぎ穂かな

夜に入ば直したくなるつぎほかな

たのみなきおれがさしても接木哉

石上に蠟燭立てゝ接穂かな

畑打田打

餅腹をこなしてからの接穂かな

畑打や子が這歩行つくし原

畑打や田鶴啼わたる邊り迄

種蒔

雁どもゝもつと遊べよ打門田

朝顔蒔

嫌捨の雪かきわけて田打かな

汐干

棒きれでつゝいて置や庵の畠

我蒔た種をやれ〳〵けさの露

はや淋し朝がほ蒔といふ畑

人まねに鳩も雀も汐干かな

青天のとつはづれなり汐干潟

深川やお席の中の汐干かな

動物

落鹿角

小男鹿に手拭かさん角の跡
小男鹿の落した角を枕かな
角おちて恥しげなり山の鹿
今おちた角を枕に寐鹿かな
人鬼の見よ〳〵鹿は角落る
西山の月と一度やおとし角
寐て起て大欠伸して猫の戀
蒲公英の天窓はりつゝ猫の戀
門番が明てやりけりねこの戀
おどされて引返すなりうかれ猫

戀猫

うかれ猫奇妙に焦て戻りけり
戀猫のぬからぬかほで戻りけり
うかれ猫どのつらさげて又來たぞ
しばられて斬かくなり猫の戀
關守が叱りかへすや猫の戀
うかれ猫戀氣違ひと見ゆるなり
通ふにも四方山なり寺の戀
門の山猫の通路つきにけり
汚れ猫それさへ妻はもちにけり
さし足やぬき足や猫も忍ぶ戀

猫の仔

猫の戀めつきり棒にわかれけり
戀猫や縄目の恥を受けながら
山猫もつくり聲して忍びけり
猫の子や秤にかゝりつゝじやれる

田鼠化鶉

とぶ鶉田鼠のむかし忘るゝな
念佛せよ田鼠鶉になりたくば
田鼠鶉人は白髪と化にけり

雉子

雉子なくやきのふ燒れし千代の松
雉子なくや見かけた山のあるやうに
黒門や下たに〳〵と雉子の聲

雉子なくや先づ今日は是きりと
野佛の袖につかれて雉子の鳴く
夕雉子の走りとまりや鳰の海
雉子なくやこれより西は庵の領
小男鹿の背中を借りて雉子のなく

歸雁

板橋

かしましや江戸見た雁の歸り樣
寐た跡の尻も結ばず歸る雁

閏二月二十九日といふ日雨も漸おこたりぬれば
朝とく頭陀袋首にかけて足つひて例の角田堤に

かゝる東はほの〳〵としらみたれど小藪小家は
いまだくらかりきしかるに上のならせ給ふにや
川の面に天地丸赤々と浮みて田中は新に道を作
り溝堀はこと〳〵く板をわたしておの〳〵御遊
を待と見えたり誠に無心の草木にいたる迄春風
に伏しつゝ芽出度御代をあふぐとは覺え侍る、

五百崎や御舟をがんで歸る雁
親と子と三人連や歸る雁
足もとの明いうちや歸る雁
足もとの明い月や歸る雁
雁ゆくや人のかれこれいふうちに

辛崎を三遍まはつて歸る雁
雁行や武藏の北なし〳〵と
雁行やためつすかめつ墨田川
早立は千住どまりかかへる雁
すつぽんも羽ほしげなり歸る雁
わや〳〵と若い同士か歸る雁
行な雁どつこも茨の浮世ぞや
やれ啼なそれほど無事で歸る雁
連のない雁もさつさと歸りけり

御殿山

鶯

鶯も親子つとめか梅の花

三日月やふはりと梅に鶯が

鶯にあてがつておく垣根かな

鍬の柄に鶯なくや小梅村

鶯の目利してなく我家かな

是程の上鶯を田舍かな

鶯のまてにまはるや組屋敷

袖下はみな鶯や小せき越

松室に遊ぶ

鶯の馳走にはかぬ垣根かな

黄鳥や泥あしぬぐふ梅の花

鶯の野にしてなくや留守御殿

鶯やよくあきらめた籠の聲

鶯にほうりつけたりうがひ水

鶯や男法度の奥の院

鶯や棒にふつたる竹山に

來るも〳〵下手鶯ぞおれが垣

鶯のやけを起すや仕舞ぎは

鶯の上きげんなり上戸村

鶯の兄弟づれや同じ聲

雲雀

鶯のまてになくなりつんぼ家
なつかしや下手鶯も遠鳴は

天王寺

鶯や彌陀の淨土の東門
鶯は蜻蛉がへりも上手かな
鶯の飲んであびるや割下水
鶯やぎよつとするぞよ咳拂
晝飯をたべにおりたる雲雀哉
横乘の馬のつゞくや夕雲雀
野大根も花となりけり鳴雲雀

燕

横のりの馬のかすむや夕ひばり
大井川見えてそれから雲雀哉
さゞなみや雲雀の際の釣小舟
松島の小隅は暮て鳴く雲雀

南都

朝起の古風を捨て乙ぬ鳥かな
夕乙鳥我には翌日のあてもなし
乙鳥を待てもぞつく麓かな
乙鳥もおれが門をば聞ふげな
大佛の鼻から出る燕かな

鳥の巣

我宿は何にもないぞ巣立鳥

鳥の巣に明渡したる庵かな

浮世とてあんな小鳥も巣をつくる

又むだに口あけ鳥のまゝ子かな

塊も心置くかよ巣立鳥

切る木とは知らでや鳥の巣をつくる

雀子

善光寺

開帳にあふや雀も親子連

雀子や川の中にて親を呼

雀の子そこのけ〳〵御馬が通る

我と來て遊べや親のない雀

竹にいざ梅にいざとや親雀

雀子やお竹如來の流しもと

慈悲すれば糞をするなり雀の子

雀子のはや知りにけり隱れやう

雀子や女の中の豆いりに

踏初は千代の竹なり雀の子

杵さきや頭あぶない雀の子

大勢の子をつれあるく雀かな

飯粒や人も口明く雀の子

雀子やものやる親も口を明く

筍と品よく遊べ雀の子

赤馬の鼻で吹けり雀の子

獨座

おれとしてにらみくらする蛙かな

榎まで春めかせたり啼蛙

親分と見えて上座に鳴蛙

向々に蛙のいとこはとこかな

めでたさの煙聳へて啼蛙

我を見て苦い顔する蛙かな

象かたや櫻をたべて鳴蛙

玉川やまづ御先へと飛ぶ蛙

悠然として山を見る蛙かな

其聲でひとつ踊れよ啼蛙

產さうな腹(イヒ腹)をかゝへて啼蛙

我庵や蛙初手から老を啼

小高見に音頭とりの蛙かな

江戸川に蛙もきくやさし出に

五百崎や龜の子笊に鳴く蛙

叱てもしやあ〳〵として蛙かな

夕ぐれに蛙は何を思案橋

蛙なくや狐の嫁が出た〳〵と

小蛙も鳴くなり口をもつたとて

土手べりに江戸を眺むる蛙哉

薄縁に尿してにげる蛙かな

五百崎や庇の上に鳴く蛙

蕗の葉にとんでびつくり蛙かな

蛙戰といふを見に罷る四月二十日なりけり

痩蛙負けるな一茶こゝにあり

古戰場眞間の井

蝶

散る花をはつたとにらむ蛙かな

奉納

おんひら〳〵蝶も金比羅參りかな

蝶とぶや此世に望みないやうに

むつまじや生れ替らば野邊の蝶

大猫の尻尾でなぶる胡蝶かな

蝶寐るや草ひきむしる尻の先

葎からあんな胡蝶の生れけり

田に畑にてん〳〵舞の胡蝶かな

門の蝶子が這へばとび這へばとぶ

小男鹿や蝶をふるつてまた眠る

氣の毒やおれをしたふて來る胡蝶

てふといふ娘山路の案内しけるに俄雨ぱら〳〵とふりければ

木の蔭やてふとやどるも他生の縁

引かける大盃に胡蝶かな

白黄色蝶もいろどりしたりけり

淺黄だけ小しじみなり飛胡蝶

枕する腕に蝶々の寐たりけり

大笠にふせられはぐる胡蝶かな

來る蝶に鼻を明する垣根かな

我迹につき損じてや歸る蝶

黄組白組くる蝶の出立かな

賓都留のお鼻を撫る胡蝶かな

草庵の棚さがしする胡蝶かな

蝶飛ぶや煑しめを配る蕗の葉に

蝶ひら〳〵庵の隅を見とゞける

籠の鳥蝶をうらやむ目付かな

鳥さしの竿のじやまする胡蝶かな

茂林寺

蝶々のふはりと飛んだ茶釜かな

蠶

蠶醫者〳〵はやる娘かな

末の子も別にねだりて蠶かな

惣々に機嫌とらるゝ蠶かな

様つけに育てられたる蠶かな

虹

それ虹に世話をやかすな明り窓

神風や虹がをしへる山の道

田螺

地獄

夕月や鍋の中にて啼田螺

まひ〳〵

まひ〳〵や翌なき春を笑ひ顔

梅

植物

天神參

ちさい子の麻上下や梅の花

梅の木や欲にや願はぬ三日の月

梅折るや盗みまするとと大聲に

梅の木のあるかほもせぬ山家かな

餅組も一座敷なり梅の花

鳥の音に咲うともせず藪の梅

梅に月いやみからみはなかりけり

菰はげば早あか〳〵と梅の花

國十郎

咲たりな江戸生ぬきの梅の花

梅折や天窓のまるい影法師

信濃言葉

赤いぞよあのものおれが梅の花

相馬覽古

梅が香や平親王の御月夜

梅さくや唐土の鳥も來ぬ先に

月の梅酢の蒟蒻のけふも過ぬ

笠着るや梅の咲く日を吉日と

山鶯よりもめづらしく新金を齒にあてけるを

二歩判の初音出しけり梅の花

下戸村やしんかんとして梅の花

紅梅やそつとしかれば二本まで

梅の花爰を盗めとさす月か

そら錠と人にはつげよ梅の花

藪尻の賽錢箱や梅の花

男禁制の門なり梅の花

欠茶椀開帳したり梅の花

梅さくや泥草鞋にて小盃

臭水の井戸の際より梅の花

ひか〳〵とつむりにしみる梅の花

梅さくや老の頭にしみるほど

朝聲や子の曰く梅の花

梅さくや江戸見て來たる子供客

大淀や大曙の梅の花

古之爲關也將以禦暴今之爲關也將以爲暴

關守の灸點はやる梅の花

風呂敷を冠て見たり梅の花

柳

一入の新善光寺ぞ梅の花

この壁にむだがき無用梅の花

庵の梅よんどころなく咲にけり

長谷の山中に年籠して

我も今朝清僧の部なり梅の花

藪村やきぐれあたりの梅の花

島原

入口のあいそになびく柳かな

皮剝が腰かけ柳青みけり

螢飛夕べをあてやさし柳

門柳天窓でわけて通入けり

人聲にもまれて青む柳かな

犬の子のふまえて眠る柳かな

けろりくわんとして鳥と柳かな

善光寺堂前

白猫のやうな柳も御花かな

野雪隱のうしろをかこふ柳かな

我町はしだれ嫌の柳かな

一吹にほんの柳となりにけり

青柳に金平娘立にけり

櫻

たつた今つつさしたれど柳かな

江戸も江戸江戸眞中の柳かな

ちり込むや柳が絮もねまる程

馬の子が柳潜りをしたりけり

柳からもゝんぐわあと出る子哉

下總へ一筋かゝる柳かな

通ぬけせよと垣から柳かな

如病得醫

花を折拍子にとれしやくりかな

花のかげ南無さん火打なかりけり

かう活けて居るもふしぎぞ花の蔭

三月十七日保科詣

花ちるやとある木蔭も小開帳

人撰して一人なり花の蔭

おとろへや花を折にも口まける

花の木に雞寐るや淺草寺

觀音奉納

只たのめ花もはら〳〵あの通り

山の月花盗人を照し給ふ

花のかげあかの他人はなかりけり

堪忍をいたしにゆくや花のかげ

刈萱堂

花の世は地藏ぼさつも親子かな

花の木のもつて生れた果報かな

大和めぐりする人に旅の眞言といふをさづけて

かならずよ跡見よそわが花の雲

今の世や猫も杓子も花見笠

有やうは我も花より團子かな

苦の娑婆や花が開けばひらく迚

さる人は病氣をつかふ花見かな

新吉原

行燈ではやしたてるや花の雲

御所にて

捧つきが腮でをしへる櫻かな

櫻へと見えてじん〳〵はしより哉

一本は櫻もちけり婆婆の役

此やうな末世を櫻だらけかな

人聲にほつとしたやら夕さくら

氣に入た櫻のかげもなかりけり

花守や夜は汝が八重さくら

袖たけの初花櫻咲にけり

山櫻皮を剝れて咲にけり

傘にべたりとつきし櫻かな

天からでも降たるやうに櫻かな

けふは町隣なる廉美と前の日より約し置けるに
かれさはりありとて止ぬさはとて翌の命待もの
かはと只ひとり來りしに幸懐に五元集といふも
のゝあればこれ屈竟の相手なり

櫻々と唄はれし老木かな

一夜さに櫻はさゞらほさらかな

下々に生れて夜もさくらかな

小坊主や親の供して山さくら

蝋羅戯

ぶらんこや櫻の花を持ちながら

櫻草といふ題をとりて

我國は草も櫻を咲にけり

餓鬼

花散や呑たき水を遠霞

畜生

散花に佛とも法ともしらぬかな

修羅

聲々に花の木蔭の博奕かな

人間

咲く花の中にうごめく衆生かな

東西の花に散たてられこゝろも花にうつりゆくといふ日は三月二十日なりけり

煤くさき笠も櫻の降日かな

君が世の大めし食ふて櫻かな

小むしろや花くたびれのどさ〳〵寐

慾垢のぼんのくぼへもさくら哉

提灯は花の雲間へ入にけり

髪髭も白い仲間や花の蔭

うつるとも櫻の風ぞ花の蔭

草庵に來てはくつろぐ花見かな

なまけるや明日も月あり花ありと

石佛風よけにして櫻かな

鬼の住む沙汰もなくなる櫻かな

さく花をあてに持出す佛かな

賽錢にあをり押さるゝさくらかな

善の網惡のさくらの咲にけり

花さくや目につかはれて大和まで

花さくや日傘の蔭の野酒盛

夜さくらや美人天から下るとも

新吉原

うへ櫻花も苦界はのがれざる

江戸櫻花も錢だけ光るなり

夜や天の音樂聞し人

花ちるや末代智惠の凡夫衆

念佛踊

花さくや三味線にのるお念佛

天邪鬼蹈られながらさくらかな

若い衆に先越されしよ花の蔭
先くりに花さく山や一日づゝ
遠山の花に明るし東窓
開帳の目當に立し櫻かな
茶屋村の一夜に湧きし櫻かな
鮟汁や櫻が下のあけごゝろ
目の毒と知らぬうちこそ櫻かな
散る花を脇になしてや江戸櫻
花咲くや京の美人のほゝかむり
花さくや下手念佛も錢が降る

椿
藤の花

白雲にお花の種を蒔ばやな
こちとらは花が咲かうが咲くまいが
十人の目利はづれて花の雨
翌々とまたるゝうちが櫻かな
かまくらや昔どなたの千代椿
はるの日の入所なり藤の花

千貫戸樋にて

高戸樋や雫してゆく藤の花
百兩の石につりあふつゝじかな

鶯
躑躅
山吹

川は又山吹咲ぬよしの山

根岸の里

山吹をさし出しさうな垣根かな

木の芽

山里や猫も木の芽もほけいでぬ

菜の花

かるたほど門の菜の花咲にけり

大菜小菜食ふ側から花咲きぬ

菜の花や霞の裾に少しづゝ

蓋

今すこしたゝなくもがな菫草

あさぢふや菫しめりの薄草履

若草

若草や北野參りの子供講

草萠

芽出しから人さす草はなかりけり

蕗の臺

石疊つぎめ〳〵や草青む

蕨

門の草生へはじめからうとまるゝ

一はたに惡まれ草の青むなり

草の戸の春は來にけり蕗の臺

庚申の足の下から蕨かな

片かげに棒のやうなる蕨かな

夏

時候

六月

六月や月夜見かけて煤拂

六月にろくな月夜もなき夜かな

戸口から青水無月の月夜かな

夏の夜

夏の夜や二軒して見る草の花

短夜

短夜に竹の風ぐせ直しけり

短夜をよろこぶ年となりにけり

短夜や赤い花咲く蔓のさき

短夜に木錢がはりのねむり哉

短夜や吉原駕籠の宙をとぶ

白井峠にて

信濃路の山が荷になる暑かな

蕗の葉にぽんと穴あく暑かな

關宿舟中

暑き夜の荷と荷の間に寢たりけり

米値段くつくとさがる暑かな

米國の上々吉の暑かな

大帳を枕にしたる暑かな

暑き夜をとう〳〵善光寺詣かな

暑き日よ忘るゝ草を植てさへ

白山の雪きら〳〵と暑かな

暑き夜や蝙蝠かける川端に

江戸住人

暑き日や青草見るも錢次第

暑き日に面で手習した子かな

暑き日や庇をほじる馬鹿烏

あゝ暑し何に口あく馬鹿烏

暑き日や火の見櫓に人の顔

身一つをひたと苦になる暑かな

涼し

田中川原如意湯に妻浴みして

なを暑し今來た山を寢て見れば

新家賀

涼しさや糊のかはかぬ小行燈

春甫京へ行を送る

涼しからん這入口から加茂の水

涼しさや笠を帆にして煮賣舟

四條河原

涼風に月をも添て二文かな

涼しさや阿彌陀成佛の此かたは

草雫今こしらへし涼風ぞ

涼風やちから一ばいきりぐす

涼風も隣の竹のあまりかな

拵へた露も涼しや門の月

おく信濃に浴して

下々も下々下々の下國の涼しさよ

裏長屋のつきあたりに住す

涼風の曲りくねつて來りけり

涼風も一升入りのふくべかな

涼しさや土橋の上の煙草盆

涼しさや沈香もたかず屁もひらず

日々十里

草臥や涼しい木蔭見て通る

棧を知らずに來り涼しさに

涼風の出口もいくつ松柏

涼しさやこゝ極樂淨土の這入口

柴垣や涼しき蔭に方違ひ

涼しさに大福帳を枕かな

涼しさや夜水のかゝる井戸の音

涼しさの下駄いたゞくやすゐかん寺

銚子にて

朝涼や汁の實を釣る背戸の海

土用

白菊のつんと立たる土用かな

天文

梅雨

正直に入梅雷の一つかな

入梅晴や二軒並んで煤拂

五月雨

五月雨の竹にはさまる在所かな

妙義山

五月雨や夜もかくれぬ山の穴

湯の瀧も同じ音なり五月雨

夕立のそれから直に五月雨

草の葉や馬鹿丁寧の五月雨

ざぶ〳〵と馬鹿念入て五月雨

五月雨も中休みかよ今日は

五月雨や胸につかへる秩父山

五月雨も仕舞のはらりはらりかな

夕立

兎角してはした夕立ばかり也

あとからもまだござるぞよ小夕立

夕立や行燈直す小縁先

夕立やはらりと酒の肴ほど

夕立や樹下石上の小役人

夕立に晝寢の尻をうたれけり

今の間に二タ夕立やあちら村

言譯に一夕立の通りけり

向から別れて來るや小夕立

夕立は天王様がお好きやら

風ばかりでも夕立の夕べかな

寢ならんで遠夕立の評議かな

夕立や兩國橋の夜の體

夏の雨

夏の月

夕立の裏を見せたる峠かな

夕立や咬みつくやうな鬼瓦

夕立のとり落したる小村かな

夕立や二文花火も夜の體

虎が雨

辛崎や夜も一入夏の雨

年寄の袖としらでやとらが雨

とらが雨など輕んじてぬれにけり

我庵は虎の泪もぬれにけり

女郎花つんと立たりとらが雨

寝せつけし子の洗濯や夏の月

雲の峰

なぐさみに蓁を打なり夏の月

小むしろや茶釜の中の夏の月

寝むしろや尻を枕に夏の月

戸口から難波潟なり夏の月

蟻の道雲の峰よりつゞきけり

湖水から出現したり雲の峰

投出した足の先なり雲の峰

湖へずり出しけり雲の峰

山人の枕の際や雲の峰

寝むしろや足でかぞへる雲の峰

祭せよ小雲が山をこしらへる
風あるを以て尊し雲の峰
早稲の香や夜さりも見ゆる雲の峰

地理

夏山

夏山やひとり機嫌の女郎花

清水

小金原

母馬が番して呑ます清水かな
山里は馬にかけるも清水かな
此入りは西行庵か苔清水

青田

笹つたふ音ばかりでも清水かな
くわう〳〵と穢太が家尻の清水かな
清水見てから大門の長さかな

戸隠山

堀風呂に流しこみたる清水かな
人の世の錢にされけり苔清水
わる赤い花のこて〳〵苔清水
山番の爺が祈りし清水かな
稽古笛田はことゞく青みけり
起々に慾目引ぱる青田かな

寝ならびておのが青田をそしるなり

野の宮に隠れたる鳫芝法師を訪ふ

柴の戸や青田の風に養はれ

人事

更衣

下谷一番の顔して更衣

おもしろい夜は昔なり更衣

年とへば片手出す子や更衣

けふの日や替てもやはり苔衣

人らしく替もかへたり苔衣

袷

草庵

其門に天窓用心ころもがへ

親といふ字を拜むらん更衣

杉で拭く小便桶や更衣

衣かへて座て見てもひとりかな

若衆は浴衣ぞいざや更衣

立ながら綿ふみぬいて出たりけり

文虎か妻みまかりけるに

おりかけの縞目にかゝる初袷

小兒の行末を祝して

たのもしやつんつるてんの初袷

春日野の鹿に嗅るゝ袷かな

南無あみだどてらの綿よひまやるぞ

ふだらくや赤い袷の小順禮

大山詣

四五間の木太刀をかつぐ袷かな

金太郎が膝ぶしきりの袷かな

帷子

京の夜や白い帷子白い笠

青空のやうな帷子着たりけり

帷子にいよゝ四角な親父かな

浴衣

面白う汗の流るゝ浴衣かな

灌佛

鶯のほゝと覗くや花御堂

永日にかわく間もなし誕生佛

雀子もおなじく浴る甘茶かな

水ざぶり佛なりやこそ天窓から

今の世や猫も杓子も花見堂

御祓

玉川

萩もはや色なる浪や夕はらひ

麻の葉に借錢書いて流しけり

形代をとく吹きふるせ萩すゝき

形代にさらば〳〵をする子かな
燈籠のやうな花咲く御祓かな
蟾どのゝ這出たまふ御祓かな
ちとの間名所なりけり夕祓
水さく〳〵雨拵へて御祓かな
昔からこんな風がよ夕はらひ
母の分もひとつ潜る茅の輪かな
鉾の兒群集に酔もせざりけり
月鉾にもつと聳えよ朝煙
小童がかぶりたがるやつくま鍋

茅の輪
祇園會
つくま祭

今一度婆もかぶらんつくま鍋
朝顔にはげまされたる夏書かな
菊畑の木札もちよいと夏書哉
夏籠と人に云はせて朝寝坊
初幟田も引き立ぬ〳〵
一際に田も引き立ぬ初幟
乞食町とは見えざりし幟かな
三尺に足らぬ幟のお客かな
江戸住や二階窓から初幟
とつときに金太郎するや幟客

夏籠
幟

菖蒲酒

小幟の愛嬌にさくつゝじかな
染幟横から見ても都かな
我門を山へ出て見る幟かな
山風はがつくり落や門幟
小幟のこつそり暮るゝ座敷哉
藪村は爰にと立てる幟かな
相伴に蚊もさわぐなり菖蒲酒

粽

粽ゆふと顔も披露や入る座敷
お袋が手本に投げるちまきかな
笹ちまき手本通りに出來ぬなり

薬日

私が引むすんでも粽かな
折釘にかけたところか粽かな
がさ〳〵と粽をかぢる美人かな
神國は天から藥ふりにけり
藥降る日とてがらつく隱居かな

夏座敷

無限欲有限命

此風に不足呼ぶなり夏座敷
旅やせをめでたがるなり夏座敷
田の人の見るも恥し夏ざしき
よい猫が爪かくすなり夏座敷

青簾

隱家や死なばすだれの青いうち

あながちに青くなくとも簾かな

納涼

藪村の貧乏なれて夕納涼

魚どもが桶とも知らで夕納涼

此月に涼みてのない夜なりけり

人形町

人形に茶をはこばせて涼みかな

門涼み人の朝顔咲にけり

銚子にて

朝涼や汁の實を釣春戸の海

きのふは鮮魚に宴してけふは松宇佛

夜涼みか笑ひ納めてありしよな

江戸住人

錢なしは青草も見ず門すゞみ

身の上のかねとしりつゝ夕涼み

夜に入れば下水の上に涼みかな

まゝつ子や涼み仕事に蓁たゝく

なぐさみに鰐口ならす涼みかな

水に湯にどの流しでも夕涼み

線香で煙草ふきゝすゞみかな

夜々や同じ面でも門涼み

罪あらじ座頭の涼み耳なくば

さすとても都の蚊なり夕涼み

上總國百首の郷は東西に山連り西北に海開けて防人の備へに窟竟の地なりとて此度陣屋いとなむ繩張といふことあり其畠の瘤のやうにさし出て妨なる小家あり主と見えて塑をもしらぬ老婆ひとり廊をうみて居たりけるを奉行人深く憐みて汝子ありやといへば老婆いふをのこひとりもちたりけるがいつ〳〵の年古郷をよそに振りすて今は江戸の本所とやらんに人の髪ゆふわざをなすよし風のたよりに聞侍るとばかり泪ぱらひ

〳〵答ふさあらば其男呼返すべしよろしき替地にかひ〳〵しき家をあたへしかのみならず其男には永く髪結司のゆるし文とらせて汝には生涯二人扶持といふを申下して身をやすくすぐさせんあさ糸の綱き簾ひをやめて遲々たる春の日にはありあふ花に無常を觀じ凄々たる秋の夜にはかたぶく月に西方をねがひ明暮心任せに菩提の種を蒔なばなんぼうたのしからん汝が此家このかまへのさばりになるこそ天より汝に幸ひ下したまふなれとく〳〵爰をしりぞきかしこにうつれよといふに老婆むく〳〵とはらだゝしきそぶりして灯心つかれたらんやうなる首打ふり〳〵いふやうよくもあざむきたまふものかな是はわ

らばが先祖よりいく世ともなく住ふるして大事の〳〵栖なればたとへ黄金星にとゞく程たまはるとも我目には一椀の麥飯にしかずとこそ思ひ候へたゞ〳〵此はにふの小屋こそさうなき寶なれよしや命斷るとも外へは行かじと手すり足すり貝を作りてなかぬばかりに申せば奉行人の慈悲も今は施すべきよすがなく老婆後にな悔ひそとふたゝび細ばりしてつひに其家をよきて地とりなりぬあはれ月日の照らすかぎり露霜の落るところに生とし活るもの誰か國命にそむき奉らんしぶときをこの者にぞありける。

月さへもそしられたまふ夕涼み

母親やすゞみがてらの針仕事

有明や二番尿から門すゞみ

一尺の瀧も音して夕涼み

義理のある親子睦じ夕涼み

爰々とめん鷄呼ぶや夕涼み

越後新潟にて

下駄ころりきやらりかれらの夕涼み

兩國橋上

下見ても方圖がないぞ納涼舟

煤くさき彌陀とならびて夕すゞみ

穴ばたに片足さげて夕涼み

青草も銭だけそよぐ門涼み

俳諧宗雲水に送る

鬼茨も添て見よ〳〵一涼み

有明に涼み直すやおれが家

虫干

虫干を背中でするや草枕

虫干の虫やぞろ〳〵背中から

にげるなり紙魚が中にも親と子よ

晝寢

算盤に肱をもたせて晝寢かな

蓮の葉に片足のせて晝寢かな

笠をきた形でごろりと晝寢かゞ

田の畔や菰一牧の晝寢小屋

笠を着て膝をかゝへて晝寢かな

一枚の榎かざして晝寢かな

山の木の枝おし曲て晝寢かな

人並に晝寢したふりする子かな

田の人を心で拜む晝寢かな

今までは罰もあたらぬ晝寢かな

山水に米をつかせて晝寢かな

人を見てまた〳〵無理に晝寢かな

打水扇

一文が水を皆打つ笹葉かな
まつかげや扇でまねく千兩雨
手にとれば歩行たくなる扇かな
西山や扇落しに行月夜
夕暮の腮につゝばる扇かな
乙松や今年まつりの赤扇
小座頭の天窓へかふて扇かな
寢謠の尻べたたゝく扇かな
丁寧に鼠の喰ひし扇かな
駕籠さきを下に〳〵と扇かな

膝におく斗でも涼し白扇
小道者や手を引かれつゝ赤扇
ぼのくぼに扇をちよいと小僧かな
煩惱の腹をばち〳〵扇かな
今一ッ團十郎せよ赤扇
橋の欄干にもたれて扇かな
老けりな扇づかひの小せはしき
白扇風の立さへ新らしき
鼻先に智慧ぶらさげて扇かな

題目

未レ攀レ歩時先已到　未レ動レ舌時先説了
直饒著々在レ機先一　更須レ知レ有二向上竅一

團扇

貰ふよりはやくうしなふ扇かな

大寺の扇で知れし小僧の名

太郎冠者まがひに扇かな

團扇はつて先そよがする萍かな

江戸の水呑とて左り團扇かな

まゝつ子が一つ團扇の修覆かな

春の子が盧生もどきの團扇かな

喰はず貧にとて左り團扇かな

蚊帳

畫團扇をしはくしやにするわらべかな

江戸やしき

馬味でも萠黄の蚊屋に寢たりけり

手をすりて蚊屋の小すみをかりにけり

新らしき蚊屋に寢るなり江戸の馬

蚊屋つりて食に出るなり夕茶漬

裏住やそりの合たる一人蚊屋

田の人よ御免候へ晝寢蚊屋

寸見ればつぎだらけ也おれが蚊屋

小憎しや蚊屋の中なる小盃

紙帳

ひとり寢の太平樂の紙帳かな
京人はあかるさ知らじ紙の蚊屋
ごろり寢や紙帳の窓の三日の月
初からつりはなしたる紙帳かな
出る月は紙帳の窓の通りかな

病後

塵の身と共にふは〳〵紙帳かな
留守中も吊り放したる紙帳かな

蚊遣

蚊いぶしもなぐさみになる獨かな
大雨の敷居にちよいと蚊遣かな

釣葱

茶ばなしのあいそにちよつと蚊遣かな
水かけて夜にしたりけり釣葱

心太

あら井戸や小魚と遊ぶ心太
旅人や山に腰かけて心太

一夜酒

甘露ふる世もそつちのけ一夜酒
神代にもあらじ一夜にこんな酒
神風の吹や一夜に酒となる

冷汁

冷汁や庭の松蔭さくら蔭
冷汁の莚引かする木蔭かな
冷汁やさつと折込む雷(いなびか)り

日傘

あんよ〳〵や母を日傘もち

母親にさしかけさせし日傘かな

水呑むをまつ〳〵はさむ日傘かな

田植

粒々皆辛苦

もたいなや晝寢してきく田植唄

信濃路や上の上にも田うゑ唄

身一つすどすとて女やもめの哀は

おのが里仕舞うてどこへ田植笠

住よし

唐人も見よや田植の笛太鼓

早乙女

妹が子や笠のほしさに田を植うる

蕗の葉に鰯を配る田植かな

馬までも田休すなり門の原

隱家の畑にうへる早稻かな

只た今旅から來しを田植馬

明神の鳥も祝へ田植飯

姥捨山

植のこせせめては月の田一枚

今の世や見榮半分の田植唄

早乙女や箸にからまる草の花

鵜飼

早乙女が尻につかへる筑波かな
賑しう鐘の鳴込む鵜舟かな
鵜のまねを鵜より上手な子供かな
放れ鵜の綱のあるとも知らざるや
夜に入れば只下るさへ鵜舟かな
鵜も親子鵜飼も親子二人かな
鵜の椀へ先へ入たる鱠かな
叱られて又這入る鵜のいぢらしや
子持鵜が大聲あげて戻りけり
下闇の外の闇なりうかひ村

鮓

手なれ鵜の塚に埋める髻かな
わや〳〵と土産をねだる鵜の子かな
放れ鵜が子の鳴く舟に戻りけり
ひいき鵜は又もからみて浮びけり
露の世や露のこわきにうかひ村
手枕や親子三人鵜のかせぎ
夢の世を鵜と語りつゝかたりつゝ
淋しさを鵜にいひつけて放すなり
鮓になる間に配るまくらかな
鮓賣のいそがぬ聲に暮涼し

川狩

なか〳〵に精進鮓のかるみかな

川狩のうしろ明りやむら木立

川狩や地藏のひざの小わき差

動物

鹿の子

鹿の親笹吹く風に戻りけり

はなれ鹿子の泣聲に戻りけり

膝の上に登りさうなる鹿の子かな

庭鳥にふまれて育つ鹿の子かな

俄川にとんで見せけり鹿の親

杜鵑

上人の聲を聞き知る鹿の子かな

人聲に子を引かくす女鹿かな

老翁岩にこしかけて一軸をさづくる圖に

我汝を待事ひさしほとゝぎす

是でこそ御時鳥まつに月

這渡る橋の下よりほとゝぎす

時鳥俗な庵とさみするな

ほとゝぎすなくや頭痛のぬけるほど

此雨にのつぴきならじ時鳥

せはしさを我にうつすな子規

鎭西八郎爲朝人礫うつ所に

時鳥蠅虫めらもよつく聞け

卯の花もちそうにさくか蜀魂

急ぐかよ京一見のほとゝぎす

かゝる時早く鳴け〳〵時鳥

この闇に鼻つまゝれなほとゝぎす

時鳥けんもほろゝに通りけり

築山やいはひて一つほとゝぎす

墓どのゝ葬禮はやせ時鳥

時鳥通れ辨慶こゝにあり

卯の花の梅よ櫻よほとゝぎす

耳ひとつ御ンかし玉へ時鳥

一降や待かね山のほとゝぎす

歩きながら傘ほせばほとゝぎす

宵の雨拂子投げたかほとゝぎす

其通り石もなくなりほとゝぎす

夏山や鶯雉子時鳥

是はさて寢耳に水のほとゝぎす

大江戸やをめずおくせずほとゝぎす

鍵持の圖に

閑古鳥

やるまいぞどつこいそこの時鳥

閑窓

我家に恰好鳥の鳴にけり

吉日の卯月八日も閑古鳥

高野山

地獄へは斯う参れとか閑古鳥

前の世のおれがいとこか閑古鳥

閑古鳥泣坊主相違なく候

誰々が影法師うすき閑古鳥

我前世見て知れりや閑古鳥

羽抜鳥

大酒の諫言らしや閑古鳥

先住のつけ渡りなり閑古鳥

よい聲を鼻にかけるや閑古鳥

柿崎やしぶ〳〵鳴の閑古鳥

好々やこの年よりを呼ぶこ鳥

切株に摺鉢きせて閑古鳥

なか〳〵に安堵がほなり羽抜鳥

人里をとかくたよるや羽ぬけ鳥

ばか鳥よ羽抜けてから何思案

惡まるゝ鳥は羽もぬけぬなり

老鶯

鶯よ老をうつるな草の家

行々子

はげ天窓たがをかけろと行々子

雨乞が馬鹿〳〵しとや行々子

馬の子の寢入ばななり行々子

行々子一本芦ぞ心せよ

十日ほど雨うけ合ふか行々子

へら鷺は無言の行や行々子

葭切や一本竹のてつぺんに

水鶏

水鶏さへ叩かずなりぬ老が家

四五町の事で來ぬなり鳴水雞

通し鴨

水雞なく拍子に雲がいそぐぞよ

まつて居る妻子もないか通し鴨

蝙蝠

かはほりやさらば汝と兩國へ

烟して蝙蝠の世もよかりけり

かはほりや鳥なき里の飯時分

かはほりや仁王の腕にぶら下る

蛇の衣

古婆がかたにかけたり蛇の衣

法の世や蛇もそつくり捨衣

しほらしや蛇もうき世を捨衣

蕣

罷り出たるは此藪の蕣にて候

蝸牛

霧に乗る目つきして居る蟇哉

蟾どのゝ妻や待らん子鳴くらん

雲を吐く口付したり蟇

電で天窓なでけり蟇

卯の花のほろり〳〵や蟇の塚

夕月や大肌ぬいでかたつぶり

里俗かたつむりをでいろといふ

此雨の降るにどつちへでいろかな

朝やけがよろこばしいか蝸牛

柴の戸や錠の替りにかたつぶり

蟬

かたつぶりそろ〳〵登れ不二の山

並んだぞ豆粒ほどのかたつぶり

雨一見の蝸牛にて候

犬意見して曰く

蝸牛見よ〳〵おのが影法師

蟬なくや我家も石になるやうに

蟬鳴くや天にひつつく筑摩川

ねがはくば念佛をなけ夏の蟬

山蟬のたもとの下を通りけり

松の蟬どこまで鳴てひるになる

蜂

鰐口のくちの奥なり蟬の聲

蟬なくやつく〳〵赤い風車

初蟬のうきを見ん〳〵見みん哉

はづかしやゆかしや蟬の捨衣

初蟬といへば小便したりけり

湖に尻をふかせて蟬のなく

蟬鳴や山から見ゆる大座敷

屎虫や蜂となつてもきらはるゝ

熊蜂も軒を知つてもかへりけり

獨樂坊を訪ふに錠のかゝりければ三界無安といふ事を

蠅

蠅よけの草を釣るして扨どこへ

豐年の聲をあげけり門の蠅

蠅一つうてば南無あみ佛かな

世がよくばも一つとまれ飯の蠅

侍に蠅を追はせる御馬かな

やれ打つな蠅が手をする足をする

草の葉や世の中よしと蠅さわぐ

長生の蠅よ蚤蚊よ貧乏村

ぬり盆にころりと蠅のすべりけり

笠の蠅もう今日からは江戸者ぞ

歸庵

笠の蠅われより先へかけ入りぬ

蠅うてば蝶もこそ〳〵立にけり

緣の蠅手をするとこを打れけり

人一人蠅もひとつや大座敷

親しらず蠅もしつかりおぶさりぬ

厄病神蠅も負はして流しけり

御首に蠅が三匹とまつた

蠅よけの羽織かぶつて泣子かな

羽蟻

心に思ふことを

古里は蠅まで人を刺しにけり

かくれ家は蠅も小勢で暮しけり

羽蟻出る迄に目出たき柱かな

きのふには一倍增せる羽蟻かな

螢

初螢さつとそれたる手風かな

もう一つ川を越せとよ飛ぶ螢

ゆけ螢とく〳〵人の呼うちに

大螢ゆらり〳〵と通りけり

不忍池

螢火や呼らぬ龜は膳先へ

きれ草鞋螢とならば墨田川

我袖を親とたのむか逃ほたる

痩たりな門の螢に至るまで

娘見よ身をうられつゝ行く螢

人聲の方へやれ〳〵初螢

逃げて來て溜息つくかはつ螢

片息になつて逃ゆく螢かな

螢籠惟光これへと召されけり

桐壺

源氏三つのとし我も三つのとし母に棄てられたれど

孤のわれは光らぬ螢かな

初螢なぜ引返すおれだぞよ

鍋尻にちらり〳〵とほたるかな

寢たふりをすれば天窓に螢かな

蕗の葉に引つゝんだる螢かな

今釣た草にあれ〳〵初螢

京を出て一息つくか初螢

煩惱の都出よ〳〵初螢

寢むろしや野原同然に飛螢

椀籠を上手に潜むほたるかな

初螢わけをばよけて通りけり

はつ螢女の髪につながれな

入相の鐘につき出すほたるかな

呼聲のはり合に飛ぶほたるかな

蘆の家や掃すて〳〵飛螢

蘆の家や暮るゝさまからとぶ螢

蚊いぶしの草とも知らぬ螢かな

筏上の箸にからまる螢かな

とぶ螢泪の露がなりつらん

和睦せよ石山ほたる瀬田ほたる

勝螢石山さして引にけり

京を出て一息つくか初螢

大家を上手に越えし螢かな

手枕やぼんのくぼより飛螢

市中を大骨折りてとぶ螢

わんぱくや縛られながら呼ぶ螢

初螢その手は食はぬとびぶりや

まゝつこや晝寢仕事に蚤拾ふ

蚤の跡かぞへながらに添乳かな

蚤焼て日和占ふ山家かな

蚤かんで寢せて行なり猫の親

飛ぶな蚤それ〳〵そこに角田川

草原へこすり落すや猫の蚤

木の猿や蚤をとばせる犬の上

歸庵

蚤どもゝまめ息才ぞ草の庵

よい日柄蚤が躍るぞはねるぞよ

蚤のあとそれも若きは美しき

蚊

とべよ蚤同じ事なら蓮の上

目出たさは今年の蚊にも喰はれけり

蚊の聲になれてすや〳〵寢る子かな

宵越の豆腐明りに藪蚊かな

蚊柱の外に能なき榎かな

晝の蚊の來るや手をかへ品をかへ

我宿は口で吹いても出る蚊かな

隙人や蚊が出た〳〵とふれ歩行

晝の蚊やだまりこくつて後ろから

蚊柱の穴から見ゆる都かな

年寄と見てや鳴く蚊も耳のそば
閨の蚊の初出の聲をやかれけり
たのもしき夏の藪蚊も初音かな
夕空に蚊も初聲をあげにけり
かはいらし蚊も初聲をあげにけり
壁に生ふ一本草や蚊のこもる
御佛にかぢり付たる藪蚊かな
晝の蚊の歸らるゝほどの藪もがな
きらはれて長生したる藪蚊かな
蚊もいまだ大あはれなり江戸隅

火取虫

晝の蚊をうしろにかくす佛かな
釣鐘の中よりわんと鳴く蚊かな
南無あみだ佛の方より鳴く蚊かな
蚊がちらりほらり是から老が世ぞ
一つ蚊のだまつてしくり〳〵かな

曲者隱れて覗ふ圖

哀れ蚊のついと古井に忍びけり
櫻々とわるくいはする藪蚊かな
柱ごとなどして遊ぶ藪蚊かな
入相のかね〳〵かねて火取虫

木がくれや灯のない庵にひとり虫

消してよい時分に來たり火取虫

むだ話虫に行燈消されけり

逃された草にうぢ〳〵火取虫

庵の灯は虫さへとりに來りけり

かくの如く決定してや火取虫

兩三度うろ〳〵下手な火取虫

此雨の晴間をまたで火取虫

斑猫に追れついでや火取虫

どれ程に面白いのか火取虫

毛虫

それそこが蟻の地獄ぞ這ふ毛虫

手弱女のそばへすり寄る毛虫かな

尺取虫

幽栖

虫にまで尺とられけり此柱

斧の刃や尺取虫のとり戻る

蜘蛛の子

蜘の子はみなちり〳〵の身すぎかな

蜘の子のちりとまりより三日の月

子子

日々懈怠不惜寸蔭

けふの日も棒ふり虫よ翌日も又

子子の天上したり三日の月

鰹

子子と御法の拍子とりにけり
子子よ精出して振れ翌は晴
我宿の後れ松魚も月夜かな
芝浦やはつ鰹から夜のあける
一ト切も鰹さはぎや隠者町
江戸末や一きれもうも初松魚
大將の前やどつさり初松魚
水道の水いつ浴びてはつ松魚

植物

夏木立

法談の手まねも見えて夏木立
大寺は留守の體なり夏木立
門さきや今年さしても夏木立
赤い葉の榮螺にちるや夏木立
二番火の酒のさはぎや夏木立
芝でした休み所や夏木立
夜駄賃の越後肴や夏木立

若葉

かわくまで繩張る夜や若葉風
若葉してまたもにくまれ榎かな
竹の葉につれて葎もわかばかな

若葉して中ぶらりんの曇りかな

釣瓶竿きよんとして鳴る若葉かな

一本は晝寢の足しの茂りかな

茂り葉や庇の上の湯治道

夏

木下闇

禪寺

すみ〳〵も掃除とゞくや木下闇

界隈のなまけどころや木下闇

門脇や粟つく程の木下闇

白笠を少しさますや木下闇

柿の花

澁柿のしぶ〳〵花になりにけり

役馬の立眠する柿の花

季

葉隱れの赤い李になく小犬

卯の花

卯の花の垣に名代の草鞋かな

卯の花や臼の目切と鶯と

卯の花の吉日もちし後架かな

卯の花も佛の八日つとめけり

うの花の花のなきさへ賣られけり

卯の花に一人きけの社かな

獨樂坊

樒ありひめ糊もあり花卯木

茨の花

寢所見る程は卯の花明りかな

茨の花爰をまたげと咲にけり

茨垣犬の上手にもぐりけり

牡丹

扇にて尺をとらせる牡丹かな

是ほどの牡丹と仕かたする子かな

てもさても福相のぼたんかな

雨の夜や鉢の牡丹の品定め

福もふく大福花の牡丹かな

魚淵が圖に黑と黃との紙の牡丹を作りて人々を

あざむく

合歡の花

紙屑も牡丹顏ぞや葉がくれに

寢くらしやねぶちよ佛合歡の花

合歡咲くや七つ下りの茶菓子賣

芥子の花

二十四年榮花只一夜夢

善盡し美を盡してもけしの花

桑の木は坊主にされてけしの花

芥子さけて群集の中を通りけり

門番のほまちの芥子の咲にけり

畫顏

豆腐屋が來る畫顏が咲にけり

淺間山

夕顔

畫顔やぽつぽと燃ゆる石ころへ

源氏の題にて

夕がほや男結びの垣に咲く

夕顔の花で鼻かむお婆かな

葵

祭にも逢はで突立つあふひかな

傘持は葵かけつゝくずねかな

杜若

馬の子が口さん出すや杜若

大江戸やおめずおくせず杜若

通路に梯子渡すや杜若

今朝ほどは芥に一本かきつばた

あやめ

撫子

鶺鴒は神のたよりかかきつばた

あやめめせ武門かやうに靜なり

江戸ありて花撫子も賣れにけり

男地藏の失せける時

撫子や地藏菩薩のあと先に

撫子に二文が水を浴せけり

撫子や繼母木々の日蔭花

撫子や片かげできし夕藥師

蓼の花

新らしい流灌頂や蓼の花

肴屋の裏と知れけり蓼畑

蔓の葉と握つてゆくや酒の銭

帽吊草

野に伏さば蚊屋釣り草と頼むべし

苔の花

我上へ今に咲くらんこけの花

庵の苔花さくすべも知らぬ也

苔あはれ花の咲けり埋れ家

若竹

青苔の今一入ぞ花なくば

花さわぎせずともがなの深山苔

青苔の自慢を聞に來る花

せい出してそよげ若竹今のうち

若竹とよばるゝうちも少しかな

筍

あつばれの大若竹ぞ見ぬうちに

それであれうす紫の今年竹

雀等も何か讀ぞよ今年竹

赤注連や疱瘡神の今年竹

すこし見ぬうちにあつばれ若竹ぞ

若竹と云はるゝも一夜二夜かな

若竹を頼みに思ふ小家かな

若竹やさも嬉しげに〳〵

筍の子に病のなきはなかりけり

竹の子の千代もぼつきり折にけり

筍と品よく遊べ雀の子

竹の子も名乗るか唯我獨尊と

君が世は山笹も子をそだてけり

筍よ人の子なくば花咲かん

竹の子や女のほじる犬のまね

麥秋

首たけの水にもそよぐ穂麥かな

麥秋のあてこともない夜寒かな

越後女旅かけて商ひする哀れさは

麥秋や子を負ひながらいはし賣

瓜

人來たら蛙になれよ冷し瓜

初瓜を引とらまへて寢た子かな

三日月とひとつ並べや冷し瓜

お座敷や瓜をむくさへむづかしく

茄子

初茄子扨大兵の使かな

柴の戸やもらふたる日の初なすび

鉢植や見るばかりなる初なすび

我庵の巾着茄子にくくし

青瓢

むだ花にけしきとられて青瓢

眞桑瓜

男女笑顔して夢に見えけるまゝを

頰べたへあてなどしたる着桑かな

九輪草

蓮

九輪草四五輪草で仕舞ひけり

丘の家や蓮に吹かれて夕茶漬

さく花もこの世の蓮に曲りけり

スッポンも朝飯得たか蓮の花

蓮の葉になむなむ〳〵といふ子かな

蓮の花少し曲るもうき世かな

人喰つた虹ものるなり蓮の花

直き世や小銭ほどでも蓮の花

萍の花よこい〳〵爺が茶屋

萍やうき世の風のいふなりに

萍

萍の鍋の中にも咲きにけり

大沼

萍の花からのらんあの雲へ

萍や花の臺の沼太郎

萍や遊びがてらに花が咲く

萍の花をながめて添乳かな

萍の株にして咲く門田かな

萍の裸わらはが首すじに

早苗

道ばたや馬も喰はれぬ捨早苗

秋

時候

立秋

秋立つや隅の小隅の小松島

狗子有佛性

秋來ぬとしらぬ狗が佛かな

三越路は秋立つ日なり村時雨

今朝の秋

今朝秋や疣の落たるやうな空

けさ秋といふばかりでも老にけり

殘暑

門の月暑さが減れば人も減る

二百十日

二百十日田中の旭拜みけり

朝寒

朝寒や垣の茶筅の影法師

朝寒の内に參るや善光寺

夜寒

茶店萬燈日ましにへりぬ

兩國の兩方ともに夜寒かな

六十にふたつふみ込む夜寒かな

あばら骨なでんとすれど夜寒かな

若僧の扇面に

影法師に恥よ夜寒のむだ歩行

旅

一人と帳面に書く夜寒かな

膝がしら木曾の夜寒に古びけり

親といふ字を知りてから夜寒かな

留守居

老が身は鼠も引かぬ夜寒かな

赤馬の苦勞をなでに夜寒かな

から樽を又ふりて見る夜寒かな

若い衆のつき合に寢る夜寒かな

盆の灰いろはかく子の夜寒かな

木兎のようにちよんぼり夜寒かな

窓際や虫も夜寒の小寄合

摺古木もけしきに並ぶ夜寒かな

おぢ甥の家のごちや〳〵夜寒かな

戸迷ひせしはらからに

小便所爰と馬よぶ夜寒かな

老樂

やゝ寒

子供等を心で拜む夜寒かな

のらくらが遊びかげんの夜寒かな

うそ寒

寢むしろや虱わすれて漸寒き

うそ寒や親といふ字を知てから

うそ寒をはや合點のとんぼかな

秋の日和

うそ寒や蚯蚓の唄も一夜づゝ

佛さへお留守なりけり秋日和

秋日和とも思はない凡夫かな

秋の日

なぐさみのはつち〳〵や秋日和

秋の日に力を添ふる若葉かな

秋の夜

板敷山の麓に伏して

秋の夜や祖師も箇樣な石枕

秋の夜や障子の穴が笛を吹く

秋の夜や寢あまる罪は何貫目

夜長

扨長い夜が長いぞよ南無あみだ

秋の暮

母のなき子の道習ふにをさな子や笑ふにつけて秋の暮

立な雁往めばどつこも秋の暮

病後

ゑいやつと活た所かあきの暮

蘆の穂を蟹がはさんで秋の暮

中々に人と生れて秋の暮

八月二十九日善光寺詣

本堂の柱に長崎の舊友たれかれ八月二十八日詣るとしるしてありけるに今は三十年餘りの昔な

らんおのれ彼地にとゞまりて一つ錫のもの喰ひて笑ひののしりむつましき人達なりあはれきのふ參りたらんには面會してこしかた語りて心なぐさまむもの互ひに四百餘里の道程へだゝりぬればふたゝび此世には逢がたき齡にしあればしきりに慕しくなつかしくなむ。

近づきの樂書見えて秋の暮

膝抱て羅漢顏して秋のくれ

我松も腰がかゞみぬ秋の暮

おれのみが舟を出すなり秋のくれ

松の木も老の仲間や秋の暮

生きてまた見るぞよ〳〵秋の暮

連にはぐれて

一人通ると壁に書く秋の暮

柴ちよぼ〳〵遠山つくる秋の暮

隱家や呑手を屋ふ秋の暮

佐渡ヶ島

それがしも宿なしに秋の暮

行秋

行秋を尾花がさらば〳〵かな

天文

秋風

神前

秋風や草も角力とる男山

高井野の高みに上りて

秋風や磁石にあてる古郷山

病後

かな釘のやうな手足を秋の風

秋風に歩行て逃げるほたるかな

さと女三十五日

秋風やむしり殘りの赤い花

秋風の吹けとは植ゑぬ小松かな

秋風や壁のへマムショ入道

黒染めの蝶がとぶなり秋の風

正見寺の上八十ばかりなる後住を殘して遷化ありし哀さに

秋風やちひさい聲のあなかしこ

秋風や蓮生坊が馬の尻

秋風の吹拔く四條通りかな

開帳の降りつぶされて秋の風

乳はなれの馬の顔より秋の風

牛の子の旅へ行くなり秋の風

野分

さぼてんの鮫肌見れば秋の風

から紙の引手の穴を秋の風

寢莚や野分を吹かす足のうら

天の川

病中

美しや障子の穴の天の川

木曾川へ流れ込みけり天の川

古郷に流れ込みけり天の川

ぼんのくぼから冷しけり天の川

冷水にすゝり込みけり天の川

山かげも歌で祭るや天の川

月

月蝕

人顔は月より先へ缺けにけり

春耕孫祝

門の月殊に男松のいさみ聲

深川や蠣殼山の秋の月

翌の夜の月を請合ふ爺かな

月と月そも〳〵大の月夜かな

明く口へ月がさすなり角田川

赤い月是は誰がのじや子供達

金上戸と金聾と月見かな

庵の鍵松にあづけて月見かな

是程の月や我家に寢て見たら

御祝儀に月見てしめる庵かな

目の役に拙者がならぶ月見かな

月蝕

生涯に二度見ぬ山やかけた月

世がこうと月も煩ひたまひけり

世をのけたかひあり更けて月を友

生娘の門あるきする月夜かな

今日あすの盆さへかくる月夜かな

やかましかりし老妻ことしなく

小言いふ相手もあらばけふの月

姨捨などゝは老足むづかしく

有合の山ですますや今日の月

姨捨てた罪も亡びんけふの月

欠けるなら斯かけろとやけふの月

名月

病中

名月やとばかり立居むづかしき

明月のさつさと急ぎ給ふかな

明月をとつてくれろと泣く子かな

名月やあてにもせざる壁の穴

姨捨山

けふといふけふ名月の御側かな

赤馬關

名月や蟹も平氏を名のり出

筑摩川舟留

名月やつい指先の名所山

名月や松にかけたる庵の鍵

名月や膳へ這ひよる子があらば

名月や五十七年旅の秋